

おはなし会のお知らせ



図書スタッフのおはなし会
6/11 6/25



ボランティア『ウーフ』のおはなし会
6/7 6/21

場所：2F 世界の絵本コーナー

入場無料 入退場自由

直接会場へお越しください。

企画コーナーのお知らせ

こども読書週間

4.29~6.28

世界の絵本賞

～ コルデコット賞とカーネギー画家賞 ～

オススメの本

ホットドッグ

ダグ・サラティ

/ 作・絵

矢野顕子 / 訳

(Gakken)

W サ ア メ リ カ

こども読書週間にあわせて当館所蔵の
コルデコット賞とカーネギー画家賞の歴代受賞作を紹介しています。
世界の絵本作家たちが手掛けた作品は、こどもにも大人の方にも楽しんでもらえるものとなっています。
ぜひ、お手に取ってみてください。

『今日、図書館で考える』 4.10~6.28

『せんそうとへいわ』

「せんそうはなんでなくならない?」「へいわってなに?」
本から学ぶこともきっとあるはず・・・。

休館日・館内整理日

2026			6		JUN	
日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
⑦	8	9	10	⑪	12	13
14	15	16	17	18	19	20
⑳	22	23	24	㉔	26	27
28	29	30				

休館日

館内整理日

○ 図書イベント日

☆館内整理日は図書エリアが休館となります。

1F ブラウジングコーナーはご利用いただけます。

開館時間

10:00 ~ 18:00

(1F カフェ、ブラウジングコーナーは 20:00 まで)

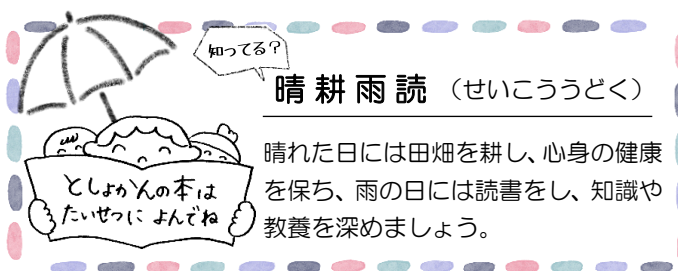
※状況により、開館時間が変更になる場合があります。

ブックポストのご案内

閉館中のご返却はブックポストをご利用ください。

場所：西入口・駐輪場の隣

☆大型本はブックポストには返却せず、図書エリアの開館時間中に 2F 図書カウンターへご返却ください



太田市
美術館・図書館
ART MUSEUM & LIBRARY,
OTA

太田市美術館・図書館

Tel : 0276-55-3036

<https://www.artmuseumlibraryota.jp/>

図書館だより

2026年6月号

臨時休館のお知らせ

6/30(火)~7/3(金)

蔵書点検のため、全館休館となります。閉館中のご返却はブックポスト(場所：西入口・駐輪場の隣)をご利用ください。



☆7/4(土)より通常通り開館します。



返却についてのおねがい

ご協力
お願いします!

この本は大型本です
直接カウンターに返却してください

・(←)左図のシールがついている大型本

- ・本と一緒に付録の CD を借りている
- ・汚れたり、破れてしまった本

ブックポストには返却せず、開館時間中に
2F 図書カウンターへご返却ください

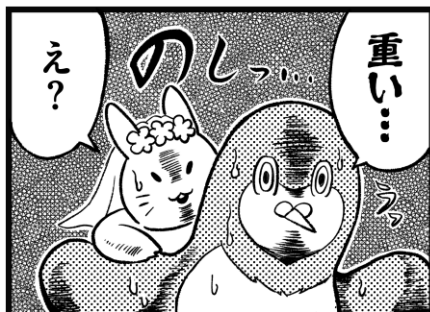


美術館・図書館のにちよう

美術館・図書館
むかしばなし おやゆび姫



「おやゆび姫」って？ 国際アンデルセン賞の名前の由来になった、デンマークの童話作家ハンス・クリスチャン・アンデルセンの物語。花から生まれた親指ほどの小さな少女が、ヒキガエルにさらわれたことをきっかけにめくるめく大冒険！はたして幸せをつかめるのでしょうか？ 気になった方はぜひ、読んでみてくださいね。



☆ツバメさん、がんばれ...！！



6月号で紹介している本をWEB・OPACで確認できます

楽しい言葉の掛け合いがたくさん♪

きょうおかいものにいったらね

マイケル・ローゼン／文
ヘレン・オクセンバリー／絵
当麻ゆか／訳
(徳間書店)
A 2026T

ハヤクさん一家とかしいねこ

マイケル・ローゼン／作
トニー・ロス／絵
ないとうふみこ／訳
(徳間書店)
A 2026T



幻のモダニスト

堀野正雄／撮影
東京都写真美術館／編
(国書刊行会)

748 冊

☆堀野の代表的なグラフモンタージュを収録。これらが表した「社会」についても注意したい。

2026 年

国際アンデルセン賞 受賞者決定

作家賞

マイケル・ローゼン

1946 年イギリス生まれ。これまで 200 冊以上の作品を手掛け、ユーモアと言葉のリズムにあふれた作品は多くの人々に愛されています。

画家賞

蔡 皋 (サイコウ)

1946 年中国生まれ。中国の作家として初めて BIB 金のりんご賞を受賞するなど、中国の絵本界の代表的な存在です。

火城

蔡皋／文
蔡皋・鞆子／絵
中由美子／訳
(童心社)
A 2026P

桃源郷ものがたり

陶淵明／原作
松居直／文
蔡皋／絵
(福音館書店)
A 2026P

美しく穏やかな
桃源郷の風景に
心安らぎます...☆

写真、映画、マンガ、SNS...身近な視覚表現はどこからきて、どこへいくのか？
視覚表現やメディア、その成り立ちや展開を整理していく断片的コラム。

第 3 回

カメラ、眼

堀野正雄とグラフモンタージュ
写真と社会性

関東大震災の復興を背景に写真は独自の写実性を活用し社会へ参画すべきだという考えが新興写真の周辺で大きく高まりました。そのなかで写真家の堀野正雄はグラフモンタージュを社会参画の方法と位置付けます。グラフモンタージュとは写真と文字を複数頁にわたり組み合わせ、ある主題を表現する形式でグラフィアに印刷された状態とします。堀野はここで板垣鷹穂、村山知義、大宅壮一、吉村貞司といった批評家やジャーナリストをシナリオや構成に迎え、自らは写真家という「技術者」に位置づけます。彼は社会的主題を表現しようとする「社会人」と共働することで写真家は「社会人」たりうると考えたからです。

けれど一方で、「共同実験」を堀野とともに行い機械美論を展開した板垣鷹穂はその論の中で人間の肉眼では捉えることのできない現実世界をカメラは捉え、さらには編集／構成を通して私たちの思考や行為の統制が出来るとも論じました。あるいは「技術」としての写真を考えるとき、私たちは「FRONT」といった戦時下の過剰なまでのプロパガンダ誌に容易にたどり着くことが出来ます。そのようなことを踏まえたとき、堀野正雄の「技術でもって社会人たんとする姿勢」に対して私たちは冷静に立ち止まることが必要であると思うのです。